

The XVI European Biological Rhythms Society Congress (EBRS2019)に参加して

宮崎 翔太[✉]

明治大学 農学部 動物生理学研究室

2019年8月25日から29日までフランス・リヨンの Faculté de Médecine Laennec で開催されました The XVI European Biological Rhythms Society Congress (EBRS2019) に参加しました。157の口頭演題（プレナリーを含む）と193のポスター演題があり、分子から個体まで多様な時間生物学的アプローチを勉強する良い機会でした。私自身、海外に行くこと自体が今回初めてで、さらにオーラルプレゼンテーションに選んでいただくという大変貴重な経験をさせてもらったので、学会“参加記”というよりは学会“体験記”としてここに記そうと思います。

オーラルでアクセプトされたは良いものの、お恥ずかしい話、発表用のスライドや原稿は日本を出発してもまだ完成させることができていませんでした。出発当日、パリへ向かう JAL の機体を実際に目にする

「（もう発表なんて）できっこないよ！こんなの乗れるわけないよ！」という気持ちでいっぱいでしたが、「逃げちゃダメだ」を反芻することでなんとか搭乗できました。初めての機内食、ビーフ or チキンではゲン担ぎとして(?) チキンを選び、臆病な自分を喰らい尽くそうとしました。現地に到着した時、西向きの移動だからなのか、もともと位相後退の生活に慣れているからなのか、時差ぼけによる体の不調を感じることは全くありませんでした。むしろ現地時間6時くらいに自然に目が覚めるというプラス面がありました。さて、私は日本ではだいたい何時くらいに起きているのでしょうか？ただし、フランスでのサマータイムを考慮します。まあそんなことよりも、発表のプレッシャーのせいで右の小鼻に原因不明の大きな“できもの”と下唇の内側に2つ、左の舌の裏側に1つの大きな口



写真1 当シンポジウムの座長と口頭発表者（左から、El Cheikh Hussein Lamaさん、Rae Silver博士、出雲麻里子博士、筆者）

内炎ができ、日に日に頭痛が増していきました。リオンは食の街と言われているようですが、発表が終わる3日目までは何もおいしく感じられませんでした。

2日目までいろんな方の発表を聞いていると、質疑応答でしばしば“on going”と“next issue (future plan)”という言葉を目にしました。質疑応答は即応力が求められるので、「これは便利だぞ」と思いました。この魔法の言葉と毎晩叩き込んだ付け焼き刃の英語を携えると、少しだけ強くなれた気がしました。そして発表当日を迎えました。発表では、私が得意とする *in vivo* real-time monitoring (*in vivo* MUA) を強調しすぎるほど強調し、「ボスにこう言えって言われました...」と言って会場を小笑いさせるくらいには少し余裕ができていました（でも実際には発表前、ものすごく顔が青ざめていたらしいです）。なんとか発表自体は終わることができましたが、質疑応答では私のリスニング力が乏しすぎて何を聞かれているかがさっぱり分からず、指導教員の中村孝博先生と座長の Rae Silver 博士にかなり助けられました。最初に質問してくださった方の質問は「こういうこともやってみたらどうか？（＝こういうやりかたも私は知っているんだぞ）」という指導的質問だったらしいのですが、緊張が MAX でいかんせん理解できないので「Thank you for your good advice.」とだけ言って、結果的にあおり返したみたいになり、失笑されました。会場中に飛び交う英語をリアルタイムで追うのに必死で余裕が無さすぎて、魔法の言葉も「しかし MP がたりない！」といった状況でした。電気生理学では学べなかった real-time monitoring でした。ともあれ発表を終えてからは頭痛がぱったりと消え、その日の IPA ビールが自分ビール史上一番おいしかったことを覚え

ています。普段から好んでお酒を飲むほうではないのですが、「一仕事終えた後のビールがうまい」ってこれかー！と思いました。

EBRS2019 では素敵な出会いがたくさんありました。Leiden 大学の Meijer 研究室の Robin (Ph.D Student) は昼行性動物と薄明薄暮性動物の *in vivo* MUA のポスター発表をしていました。Discussion もそうですが、「SCN を狙って電極を挿すの難しいよね！」とか「成功率はどのくらい？」とかいう話題でも盛り上がり、自分がやっている実験の苦労を同じ目線で共有できる人が海を越えて存在していたことに感動しました。私の次に発表した UT Southwestern medical center の出雲麻里子博士は質疑応答で「こういうことはやりましたか？」という Evans Jennifer 博士の質問に対し、「もう全部やった」と力強く返していたのが印象的でとてもかっこよかったです。本場の“catfight”を垣間見た気がしました。先述した Rae Silver 博士は私の発表を丁寧にフォローしてくださり、また彼女の過去の報告は私が発表したシンポジウム題：“Clock Networks in the Brain”の分野では大きなブレイクスルーとなり、私の研究のきっかけの一つ（一人）となっています。滞在最終日には街で Silver 夫妻が休憩しているところに出くわし、ビールをごちそうになりました。Silver 夫妻といろいろな話ができ、この時のビールが自分ビール史上二番目のビールです（暫定（笑））。ともあれ、そんな偉大な方に学生という身分でこのような体験をさせていただいたことは、きっと私のアカデミア人生において貴重なものとして残るでしょう。

リオンは歴史や風情を感じる街並みが印象的で、毎日の夜ごはんは“ブション（総称）”と呼ばれるレスト

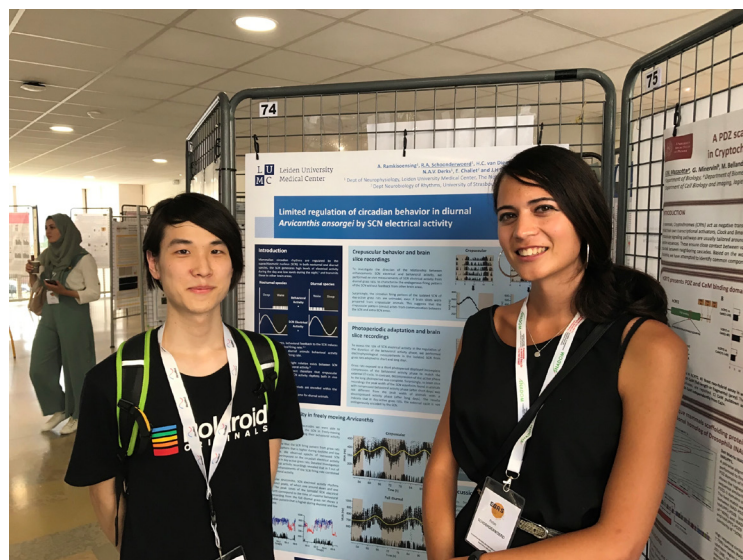


写真2 Robin のポスター前にて。

ランでリヨンの郷土料理を楽しみました。生活面では、リヨンは(特に私たちの宿まわり)はスーパーやコンビニがどこにでもあるわけではなく日曜日はちゃんと休む社会だったので、Airbnbで宿を取っていた私たちは少し不便に感じました。しかし、それと同時に日本が便利すぎるのだとも思いました。良いことの裏には悪いことがあります逆もまた然りなのだと、workとlifeのバランスを考えさせられました。ただ、ウォッシュレットだけは全世界で普及してほしいと思いました。良さしかありません。(と思います。)

最後に重ねてになりますが、今回このような貴重な体験を大学院1年生という若さでできたことはとてもラッキーなことだと思います。研究(実験)は必ずしも楽しいことばかりではないですが、こういう機会が一つのゴールに設定されていると研究のモチベーションにも繋がります。学会後、私の後輩たちには、小さなゴールを設定し一つずつクリアしていくことで、モチベーションを保つことをアドバイスしました。それでもどうしても嫌になったときは、おいしいものたくさん食べるか、よく寝ましょう!

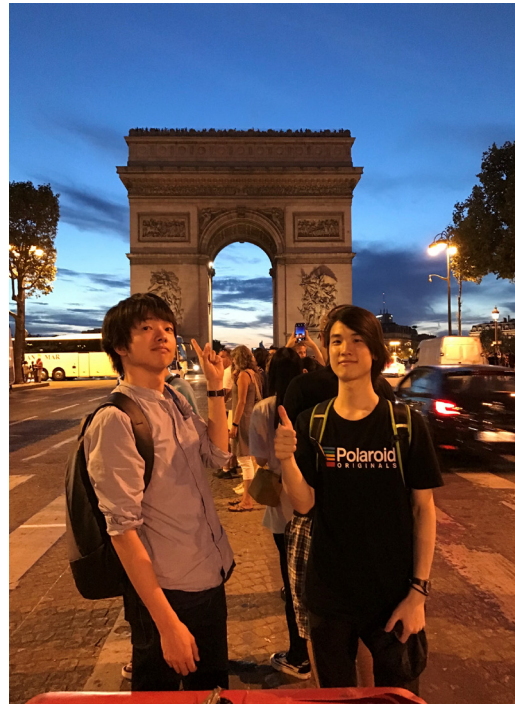


写真3 (左上) Silver 夫妻と中村孝博先生と筆者の4ショット。

(右上)凱旋門前にて。同期の杉山と筆者。

(左下)ブションやブティックが立ち並ぶリヨン旧市街。